

① 国立大学・法人化の行方 自立と格差のはざままで

(天野郁夫著、東信堂・3780円)

② 公立学校の底力(志水宏吉著、ちくま新書・81

9円)

③ オオカミ少女はいなかった 心理学の神話をめぐ

る冒険(鈴木光太郎著、新曜社・2730円)

耳塚 寛明



子どもの貧困や青年の
就労問題が容認しがたい
ところまで顕在化し、不
平等社会日本の姿がいっ
そう露からわになった。

教育政策も市場化と競

争原理へのシフトが進

み、大学は翻弄はんろうされ続け

る。①は国立大学法人化

が大学間の隠れた格差構

造を顕在化させたと警鐘

を鳴らす。「選択と集

中」政策の対象から外れ

た大学の役割を視野に入

れた、新しい国家戦略の

必要性を訴えている。

初中等教育も強い改革

要求にさらされている。

大都市圏では公立学校の

質は低いかのような印象

が定着し、富を背景に、

公立学校からの脱出者が

増える。②は12の「がん

ばっている」公立学校の

レポートである。「偉大

なる平等化装置」として

の公立学校教育の再生に

向けて、希望の光が見え

てくる。

今年もっとも楽しませ

てくれたのが③。オオカ

ミ少女など、よく知られ

た心理学上の常識のうそ

が次々に暴かれていく。

目から鱗うろこが落ちた。